

---

# AKB48監査委員会りのりえ

凸寅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

AKB48 監査委員会のりえ

### 【Nコード】

N2586R

### 【作者名】

凸寅

### 【あらすじ】

今や止まることを知らず巨大化し続けるアイドルグループ「AKB48」。

しかしその人気の裏で、日の当たる人もいればそうでない人もいるという大きな格差があるのもまた事実。

そこで秋元は自身の目の届かないところでの彼女達の様子を観察し、限りあるメディア露出組を決定することにした。

白羽の矢が立ったのは「さしこ」こと指原莉乃と「きたりえ」こと北原里英。

最強(?)のりりえコンビがAKB48という荒波の先に見たものとは？

完全趣味の二次創作です。

りのりえ、監査委員に選ばれる。

「莉乃、里英、話がある。」

秋元康、AKB48をまとめる総合プロデューサーから突然お呼びがかかったのは、つい15分前のことだった。

AKBに5期生として研究生となり、半年近くが経とうとしており、そろそろ正式メンバーへの昇格が目前に迫っていることを実感し始めていた矢先のことである。

「…ゆびちゃん、なんかやらかした？」

北原は指原にそつと耳打ちした。

いつも思うことではあったが、秋元の部屋は高校の校長室のような重苦しく冷たい空気が流れている。真白の向かい合ったソファの向こう側では、秋元が腕を組んで、ちよこんと並ぶ二人をじつと黙って見つめていた。

「…知らないって！毎日いつも通り健気にレッスンに通う相変わらずの指原ですよ。りつちゃんこそ、あれじゃない？」

指原も小さな声で北原に應對した。

「あれってどれ？」

「あれはあれ。」

「だからどれ？」

「ごめん適当に言った。」

「…。」

北原も指原も同様に緊張し、そして事態に動揺していた。

顔が似ていると言われ、よくダンスの時もペアになる。それもあってか二人はいつしか5期生の中でも互いに気の置けない仲へと成長していた。仲が良いという自覚も二人の間にはしっかりと存在していた。そんな二人はこの日、初めてこれほどまでに真剣な面持ちで二人を見つめる秋元を目にし、ただならぬ様子に否応なしに気付

かせられたのである。仲の良い二人なだけに、その二人を呼んだことに対して様々な疑問が頭の中を飛び交った。

「君達を呼んだのは、二人に話があったからだ。」

秋元はもう一度、確認するように言った。

北原は生唾を飲み込んだ。背中に汗を掻いているのがわかった。じつとりと押し掛かる秋元からのプレッシャーに押しつぶされそうになった。しかし、隣を見てみれば同じように動揺して眉を寄せる指原があり、それが北原には心強かった。北原は何に対してかもわからない覚悟をゆつくりと決め、秋元に向きなおり、彼の口から出る言葉を待った。

「君達を…」

「私達を？」

北原と指原はびくんと心臓が飛び跳ねるのを感じながら、声を揃えて答え、秋元を注視した。

「君達を正式メンバーに加えることにした。」

「え…」

「嘘…」

二人はそのまま声を失った。

「もう一度言おう。君達を正式メンバーに加えることにした。」

二人はほぼ同時に向き合った。

1、2、3、時間が経つにつれ、それが夢ではなく現実であることを実感し始めた。そして、北原は、指原の顔を見ているうちにいつの間にか涙をこぼしていた。指原も、涙を流す北原を見ているうちに感極まり、そして涙を流しはじめた。

嬉しい。

その一言に尽きた。

嬉しいと、涙が出る。

改めて実感したことだった。

それから二人は秋元のほうに向きなおり、そして立ち上がった。

「ありがとうございますっ！」

頭を深々と下げた。

「…ただし。」

秋元は二人から目を離し、静かに言った。

「え？」

「…条件がある。まあ、とりあえず座りなさい。」

秋元は抑揚の無い声で言った。二人は言われるがままにまたソファに座った。事態の展開のあまりの早さにどうしていいかわからないといったまさに「きよとん」とした表情でまた顔を見合わせた。「えっと、それはどういうことでしょうか？」

そう尋ねたのは指原だった。

「君達には頼みたいことがある。そして「頼み」を引き受けた暁には、君達を正式メンバーに加えよう、ということだ。」

その言葉が発せられたとき、北原の脳内には卑猥な映像が飛び交っていた。アイドルが身体を使つてのし上がっていくなんて、よくある話。もしかしたら、秋元は二人に関係を求めているのかもしれない。北原の妄想は激烈にヒートアップしていった。

「さしこ、私達の純情が、汚されるよ。」

北原は小さな声で言った。

「…北原、どうした？」

指原は顔がみるみる青くなる北原を見て首を傾げた。

「さよなら、青春…。」

「どうした？」

北原に対して、秋元も机を挟んで顔を覗いた。

「よく、わかりません。それで、その頼みつてのはなんでしょう？」

指原はここは私がと言わんばかりに背筋を伸ばして秋元に尋ねた。

秋元は小さく頷き、そしてゆっくりと話し始めた。

「一般的にメディア露出が多いものが人気が出る。それは当り前のことだ。それは、つまりは本人の実力うんぬんも関係するが結局は私のような立場の人間がその子を出すか出さないか、そこで人氣が

決まってしまう。しかし私はそれでは性格を含めたその子の実力を本当に見出せるとは思わない。そこでだ。」

秋元はそこで一度止め、そして言った。

「君達にはこれからAKB正式メンバーに加入し、メンバーの様子を観察し、自分なりに彼女達についての評価を私に報告して欲しい。いわば、監査だ。」

二人は顔を見合わせた。

「それが、条件だ。」

秋元は不敵に笑みを浮かべた。

りのりえ、課題を与えられる。

「…とは言っても、いきなりは難しいだろう。」

秋元は淡々とした口調で言った。

実際、指原と北原は混乱していた。というより、状況を理解するには、あまりに唐突過ぎる内容だった。念願である正式メンバーへの加入が発表されたと思えば、それには条件があり、しかもそれがAKB48のメンバーの観察であると、秋元は言うのだ。

二人が開いた口がふさがらないといった表情で秋元を注視していると、それを悟ってか、口元を少し上げて笑い、そして言った。

「まあ、そんなまぬけな表情をしてしまうのも無理からぬことだろう。さつきも言ったように、いきなりは難しい。そこでだ、君達に、小手調べといつては難だが、一つ課題を与えようと思う。」

「課題…ですか？」

状況に脳が追いついていない北原を横目に、指原はなんとか秋元に食らいつかんとして、返事した。

「そう、課題だ。まず、ある一人の正式メンバーについてしばらくの間観察を行い、そして、なんでもいい、自分の感じたこと、そう、それは勿論その人に対する悪口でもほめ言葉でもどちらでもいい、とにかく思うところを私に報告して欲しいんだ。」

それは、簡単のようで難しいのだろうと指原は思った。人が人を完全に客観的に見ることなど不可能だ。だからこそ秋元は、自分がどう感じたかを報告しろと言っているのだろう。しかし、それこそ難しい。それは、その人の性格について意見を述べるのと同時に自分の性格も吐露しているようなものなのだ。指原は、自分でも、例えば他人を上から見下ろすような発言をしたり、悪口を言ったりするのが苦手だということがわかつている。そういう、常に弱きな性格を知っている故に、余計に難しく思えた。

隣を見てみれば、ようやく少しずつ脳が動き始めたと思しき北原

が、指原のほうをじっと見つめていた。

「…どういうことなのかな？」

北原が弱弱しく指原に尋ねた。指原も、それに対し首を傾げることでしか返事ができなかった。

「その、観察するというメンバーは、誰なんでしょう？」

指原はおそろおそろ尋ねた。

すると、秋元はゆっくりと立ち上がり、そして窓辺の方に近付き、大きな本棚から一冊の本を取り出した。それは、誰のかは見えなかったが、写真集のようだった。

「…ときに、莉乃、里英、二人にとってAKB48とはなんだ？」

秋元は尋ねた。

AKB48とは、私の夢だ。

北原はそう思った。

AKB48とは、今の私の全てだ。

指原はそう思った。

今の今まで、厳密には未だに二人とも研究生だ。正式メンバーに入ること、ゆくゆくはアンダーそして選抜メンバーに入ること、それはずっと掲げてきた目標であり、夢である。そして、そのために全力で突っ走ることこそ、今の自分の全てだ。二人はそう思っていた。

そして、秋元に対して、自分の言葉で、おのおのにそれを伝えた。

「うん、いいね。その思いは大事だ。大切にしなさい。」

秋元はそう言って微かにほほ笑んだ。そして持っていた写真集をばらばらとめくり、中から挟まっていた一枚の写真を取り出した。そして言った。

「私は以前、メディアに対して、こんなことを言ったことがある。」

二人の座る対面のソファに戻り、先ほど取りだした写真を机に置いた。

「AKB48とは、高橋みなみのことである。」

置かれた写真には、満面の笑みを浮かべる高橋みなみが映っていた。

「特に何か大きな意味を持たせて言ったわけではないが、ただ直感的に考えなく言ったわけでもない。それは、私ではない、AKB48のメンバー、そして応援してくれるファンの方々が、そう思っているのだろうと思ったから、そう言ったんだ。実際、彼女には今、全体のリーダーのような形をとらせているが、それは別に私が決めたことではない。自然に、そうなったんだ。」

AKB48は普通のアイドルグループとは比べ物にならないくらいの大人数アイドルグループだ。そして、それをまとめているのが、高橋みなみである。

「では、なぜ、そうなのか。彼女の何がそうさせているのか。それを君達に調査してほしい。実際、私自身、それは興味深いこともある。そして、それを成し遂げたとき、君達をAKB48正式メンバーとして、受け入れよう。」

無茶な話だった。唐突過ぎた。自分達は秋元に利用されているだけかもしれない、そうも思った。

二人は、もう一度お互いをじっと見つめ合った。

瞳は、揺るがなかった。

二人は頷き合うと、また立ち上がった。

「わかりました。よろしくお願いします。」

声を揃えて言った。

目の前にあるチャンスを、逃すな。

それがアイドルの道だ。

こうして、指原莉乃と北原里英は、AKB48の小さな太陽、高

橋みなみの観察を開始した。

りのりえ、課題を与えられる。(後書き)

りのりえ、個人的に最強です。

りのりえ、ミニ乾杯をする。

「……うまそ。」

「……すごいうまそな音してる。」

夜、指原と北原はお好み焼きを食べるため、「お好み焼き『源五郎』」という店に来ていた。じゅーじゅーと油のはじける音を聴きながら、指原と北原は鉄板を目の前に向かい合わせに座る。周りは鉄板の上を踊る油の音と賑わう多くの客によって喧騒につつまれていた。最近、少しずつ人気上昇しているのを肌で実感している二人だったが、まだまだAKBのはしくれ、周りに二人の存在に気がつく者はいなかった。

「ゆびちゃん、それ何頼んだ？何入ってるの？」

北原は、指原の前の鉄板の上にあるものを訝しげな目で見ながら尋ねた。

「から揚げインお好み焼き。」

「何それすごい。全然おいしそうじゃない。」

「指原から揚げ好きだから揚げとお好み焼きのコラボレーション初めて見ましたよ。ちよつと気になる。」

「まあ、いわゆるおいしいものとおいしいものを混ぜるとすごくおいしいものになる原理だよな。」

「そうそう、そんな感じ。」

「……。」

「……。」

二人の間に沈黙が走った。秋元から呼び出しを受け、衝撃の発表をされてから、まだあまり時間が経っていない。未だ興奮冷め止まぬ以前に混乱状態から回復していなかった。

「とりあえず、おめでとうなのかな。」

そう切り出したのは指原だった。

「うーん、でも結果的にまだ私達、正式メンバーではない訳だし。」

微妙な立場だよな。」

秋元からの話では、二人はまだ正式メンバーには入っていない状態で、他のメンバーも二人については全く知らないとのことだった。正式に監査の役割が果たせる人物であると認められたとき、初めて公式に正式メンバーの加入が認められるらしい。さらに、仮に認められたとしても、周囲に二人が突然加入することにより何かしら勘繰られることを避けるため、同時ではなく、多少時期をずらして加入させるとのことだった。

つまりは現在、非常に中途半端、ちゅうぶらりん状態なのだ。

「よし、じゃあ、乾杯は昇格したら、その時にしよう。てことで今はミニ乾杯で済ませよう。」

指原は手元にあるグラスを持ち上げた。

「何？ミニ乾杯って？」

「北原さん、これを見てください。」

そう言っ指原はグラスを北原の顔の前に差し出した。水滴が表面についたグラスには、お茶が入っていた。

「これ、別に私達が頼んだ訳でもなく出て来た、サービスのお茶ですよ。しかも氷が良い感じに溶けて見事に中途半端に薄まった麦茶が完成しております。これで乾杯しても、普通なら興ざめつてもんですよ。でも、今日という日は、これくらいで乾杯するのが調度いい。そうは思いませんか！」

指原は熱弁した。

「よし、ミニ乾杯だ！」

北原はそう言っ勢いよく立ち上がった。

それに呼応するように指原も勢いよく立ちあがった。

周囲の人は、二人の突然の奇行に一瞬彼女達に目を向けたが、すぐにそれぞれの会話に帰っていった。

「指原さん！乾杯の音頭をお願いします！」

もうすでにテンション任せであった。

指原はごほん咳をして、そして真剣な面持ちで言った。

「えー、本日は誠にミニめでたい日であります。なんと、さしここと指原莉乃と、きたりえこと北原里英が、正式メンバー加入（仮）が決定したのであります。これを祝い、ここにミニ乾杯させていただきます。ミニ乾杯！」

指原はグラスと高々と上げた。

「ミニ乾杯！」

北原もグラスと高々と上げ指原のグラスにかちんと当てた。

「やったね北原！」

「やったねさしこ！」

「……。」

「……。」

「座ろうか。」

「うん。」

急激に冷静さを取り戻し、二人はゆっくりと席に座った。

現実問題、確かに祝うにはまだあまりに早過ぎた。

高橋みなみを観察。この二人に課された課題は、二人にとって、あまりに突然過ぎ、そして大きすぎた。

りのりえ、ミニ乾杯をする。(後書き)

書いてて楽しい。

りのりえ、つてか指原は考える。

翌日。朝。学校。

シヨートホームルームを前にして指原は机に伏せて時間が経過するのを待っていた。

「はぁー……。」

教室では通学してきた生徒達の声が響いていた。夏休みも近くなり、生徒達も少しずつ浮足立ち始めており、余計に賑わいが増しているように感じた。

輪に入ること出来ず、入る気にもなれず、指原は昨日の出来事ばかりを頭の中で反芻していた。

高橋みなみ。

指原の一つ年上。Aチームのキャプテンを担い、AKB48全体としてもリーダー的ポジションについている。AKB48発足当時からいる一期生であり、前田、小嶋達と共にやってきた一番の古株である。

肩書きを並べたところで意味は無いことはわかっていた。秋元は指原を試している。誰でもわかることを言ったところで、門前払いになることくらい容易に想像ができた。

「ああああー……まじでもう、無理だよ。なんで指原なんだ……。」

「指原さん、どうしたの？」

前に座る女子生徒が、うなだれる指原のほうに振り返って尋ねた。「や、なんでもないですホントもうすみません。」

突然話しかけられた指原は、どう返事していいものか判らず、目をきよるきよるさせながら顔の前で手を振った。

「ふーん。そっか。」

女子生徒はすぐに前へ向きなおった。

入学してから三カ月、未だクラスには友達と呼べるものができて

いない。毎日学校が終わればすぐにレッスンに向かわなければならず、クラス内の人ともほとんどコミュニケーションが取ることができずにいたのだ。

「たかみなさんか……。」

研究生である指原からしてみれば、間違いなく高橋みなみは憧れの先輩の一人であった。AKB48という名を世に知らしめた一人であることには間違いない。そして、指原や北原は、その既にある程度できあがった、完成形に近付きつつあるAKB48に加わったのだ。そして、その尊敬する先輩である高橋みなみについて、研究生のはしくれが観察し、そして「たかみなはこんな人だ！」と評価を下さなければならぬのである。

肩には重いプレッシャーが押し掛かった。

「ホントまじ……、無理だよ。てかさんなキャラじゃないよ。指原ごときだよ。ほんと指原のくせに何を偉そうに……。」

ぶつぶつと独り言をつぶやいた。

「おう、どうした、指原。」

今度はクラスの担任が指原に声をかけた。ふと顔を上げてみると教室はすでに静まり返っており、ショートホームルームが始まっていた。ぶつぶつと呟く指原に対し、クラスメイト達は、奇異なものを見る目で彼女を見ていた。

ぼつと顔が燃え上がるのを感じ、

「あ、いえ、すみません、なんでもありません、すみません」

そう言って、赤い顔を伏せて、押し黙った。

まじで、どうしょ。今日のレッスンのときに頑張るしかない。

確か今日はたかみなさんも来るはず……。

一つ言えることは、遠くから見ている、おそらく何もわからないう、ということ。その人と話して、ある程度一緒に行動することで初めて距離を縮めることができる。高橋は、研究生に対しても積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくる。初めて研究生として入ってきたとき、雲の上のような存在である彼女からきさくに話し

かけてきてもらえたことを思い出した。

これでたかみなさんに変なこと言っちゃって嫌われでもしたら、もう人生終わりだよ……、メンバーから嫌われ、秋元先生に呆れられ……、終わりだ……。

今や、AKB48は生活の一部となり、なくてはならないものとなっている。それを失うのは、人生の一部を切り取られてしまうようなものなのだ。それだけは、絶対にしたくないことだった。

終わらないように、なんとかしなきゃ。

指原は担任の視線を気にしながら、ばれないように携帯電話を取り出して、そして、今、同じように頭を悩ませているであろう、彼女の下にメールを送った。

りのりえ、ってか指原は考える。(後書き)

今週のさじこのくせにもおもしろかった！

りのりえ、ってか北原は決意する。

学校。

携帯電話がポケットの中で振動し取り出してみると、それが指原からのものだとなると、北原は小さく笑みをこぼして携帯電話を開いた。

「ん？どうしたのりっちゃん？」

前の席に座る北原のクラスメイトが尋ねた。

「んーとね、ゆびちゃんからメール。」

「ゆびちゃん？あー、AKBの人？」

「うん。」

北原はにこつと笑った。指原は、北原からしてみれば年齢は一つ下である。しかし、同じ5期生ということで、AKBとしては同期であり、周りからはよく雰囲気か似ているということまでペアとして扱われることも多く、そのために仲良くまでに時間はかからなかった。今やAKB内においては最も仲の良いメンバーとなっている。

待ち受けのサンジの画像に癒され、メールを開いた。

今日、たかみなさんに探りを入れよう。二人でさりげなく攻めればバレないはず！作戦はりっちゃんに任せます！

さしはらより

「なげやり!？」

北原は思わずメールに対してつつこみを入れてしまった。

「りっちゃん朝からテンション高いねー。」

前の席のクラスメイトはきょとんとした表情で言った。

「ま、まあ血圧高いからね。」

苦笑いを浮かべて顔を赤くした。

北原にとつても昨日の突然の発表は頭を悩ませていた。そのため昨日の夜は眠れないだろうと予想していたが、以外にもぐっすり眠れて目覚めの良い朝を迎えていることにも驚いていた。

作戦って……。何？作戦って……。

北原は、後に秋元康からA K Bの知性と言われるようになる。それだけに頭が良かった。クラスでも、成績は常に上位にしていた。しかし、だからと言って、この無茶振りには北原もどう答えたものか迷った。

探りを入れるって、何をするんだろう。

高橋みなみを観察してそこから得られた何かを秋元に報告するというのが課題であった。しかし、確かに北原もただ見ていただけは何もわからないであろうということはわかっていた。それ故に何かしらのアクションが必要であるということもわかっていた。そして指原はそれを理解した上で、その高橋みなみに近づいたための作戦を全て北原に投げ出したのであった。

たかみなさんってけっこう常に忙しそうにしてるからなー。あまりこつちから話しかけにくいんだよね。すごく優しい人なんだけど……。

高橋みなみと北原は同じ年である。しかし、A k Bとしては先輩で、また彼女のリーダーとしての存在感もあり、どうしても同じ年として話しかけることには抵抗があった。その上、現状ではまだ北原は研究生なのである。

あー、でもそうか、これで無事に正式メンバーになることができたら、そのときは随分と関係も変わってくるのかな。

なんとなく、他の正式メンバーの顔を思い浮かべた。

前田敦子。何考えているかわからない。

板野友美。何考えているかわからない。

小嶋陽菜。考えているかすらわからない。

そして、憧れの篠田麻里子、一番何考えているかわからない。

結局、誰もわからないままだ。

当たり前前のことだった。AKBは一つの団体であると同時に人数が多いゆえにやはり徒党というものも存在する。そこには性格や、加入した時期によるものもあつたが、それでもそのグループは北原が入ったときから存在し、そのために独特の雰囲気を持っていた。そして北原や指原と、高橋みなみの間にはそのグループという大きな壁があつた。

それをある程度、乗り越さなければならぬ。

乗り越すためには何ができるか。

北原は考えた。

さつしーは多分、本当にこういうの考えるのは苦手だから……私になんとかしてあげなきゃいけない。

りのりえ、ってか北原は決意する。(後書き)

これ、一応時期としては2008年の夏頃からといふことになって  
います。

りのりえ、高橋みなみ来たる。

午後五時。

前と後ろがガラス張りの部屋だ。板張りの床がきゅつきゅつと音がしている。蛍光灯の白い光だけが光源のその部屋中には、大きな音で音楽が流れていた。カラフルなそれぞれの練習着を着た研究生たちが必死にダンスを練習しているその部屋は、いつもAKBの研究生達がレッスンをを行っているレッスン場である。

十数人の研究生達は、ライバル意識を燃やしつつ、尚且つ共に歩む友として、互いに切磋琢磨するべく真剣な表情でレッスンに臨んでいた。

その中には、ぎくしゃくとした動きで踊る指原と北原がいた。

「りっちゃん、結局作戦立てられた？」

指原はとなりで顔を強張らせている北原にそつと聞いた。

「うーん、まあ、なんとなくではあるけど。」

「おお、さすが！」

指原は声を少し大きくした。

「そこ！うるさい！」

コーチが大きな声で怒鳴った。

身体をびくりと震わせて飛び上った指原は、コーチに苦笑いを浮かべて、それからまた北原に耳打ちするように話しかけた。

「え？え？それで、どうするの？てかたかみなさんの何を知れば私達は合格なの？」

「それは知らないよ。知らないっていうか、それを知ることが秋元先生が私達に与えた課題なわけだから。」

「うーん、たしかに。それで、どうやってたかみなさんに近付くの？」

AKBは最近少しずつ知名度が上がっていき、全国的にも知られるようになってきていた。そのため、全体のまとめ役としてAKB

を引つ張る高橋みなみは、北原と同学年ながら、その活動はすでに多忙を極めていた。しかし、その忙しい中でも、研究生のレッスンに時折顔を見せ、そして優しく時に厳しく研究生達に教えるのだ。普段のいじられキャラ的なイメージを持たれがちではあったが、研究生である指原や北原にとって高橋みなみという存在は、やはり遠くそして偉大な存在であった。

それゆえ、北原は、高橋みなみに対して意味も無く話しかけることにためらいがあった。自分によって多忙な高橋が迷惑を被るといふのがいやだった。しかし、だからと言って、このまま何もしないわけにもいかない。

そんな微妙に揺れる心境の中で、一つの作戦を思いついたのが、つい一時間ほど前、想い足取りでレッスンに向かう道中のことであつた。

北原は、そつと指原に耳打ちし、作戦を告げた。

「え？え？それ、本気で言ってるの？」

指原は不安を禁じえない声で北原に問い返した。

「うん、そんなに無理にしなれば、大丈夫だと思う。あとは、タイミングが微妙に難しいっていうことくらいかな。」

「いやいやいや、タイミング以外にも、いろいろ突っ込みどころ満載ですよ！北原さん、これ大丈夫なんですか！？」

「うーん、多分。それに、こういうことしかできることってないと思う。」

「どういふこと？」

「つまり、人つていうのは、アクセシントが起こって初めてその本心のところを知ることができるのかなって。例えば表面だけ良い人なんて沢山いるわけで、その人の本質を見るためには、演技する暇もなく素の自分が出てしまった時、つまり何らかのアクセシントが起こった時の対応でわかると思うの。」

北原の真剣な眼差しに対し、指原の表情は曇っていた。どうしても、不安感がぬぐえなかつた。

「確かに、そうかもしれないけど。……ところで、これどっちがやるの？」

「私がやる。ゆびちゃんは、私のフォローに回ってくれればいいから。」

指原は、変わらず真剣な表情で言葉を重ねる北原に、自信なさげに小さく頷いた。

そして二人はしばらくレッスンに戻った。

二人とも表に出さないものの心中は穏やかではなかった。

指原も不安ながら、思っていることが一つあった。

なぜ、高橋みなみの言葉は信頼できるのか。

なぜAKB48から信頼を得ているのか、それが知りたかった。

前田敦子、大島優子、篠田麻里子、彼女達は間違いなく大物だ。指原からは到底及ばない力をもっている。そしてその錚々たる面々が、疑い無く信頼を置いているのだ。

それがなぜか。指原は知りたかった。

がちやり。

突然だった。ドアがゆっくりと開く。指原と北原は一気にドアのほうに注意を向けた。

初めに目についたのは、トレードマークの、頭の上にあるリボン。今日はピンクの大きなリボンだ。あと、髪が長い。腰のあたりまであるだろうかと思った。少し太い肩。くりっとした目。服は黒いジヤージらしい。

そして。

その148.5センチという身長からは想像できないような、オーラ。

高橋みなみが、現れた。

りのりえ、怒られる。

「おー、やってるなー。」

高橋みなみは入った途端、甲高い声でそう言って、部屋を見回した。彼女が部屋に入ってきたのがわかると、北原と指原を含めた研究生達は皆、動きを即座に止めて高橋みなみに挨拶した。

「わ、元気だなー。5期生は特に元気じゃん。いいねー、将来有望。」

高橋みなみは腕を組み、笑みを湛えて言った。

指原と北原は一気に緊張感が高まったのを感じた。それは、使命のある二人だけではない。高橋みなみがくることによって、レッスン場全体が、既に緊張感を持ち始めていた。

高橋みなみは後に秋元から「AKB48の良心」と呼ぶようになるほどに優しい。気配りができ、心から人を思いやるという能力を持っている。しかし、もうひとつの面、それ自体はもしかしたらその優しさの延長線上にあるものかもしれないが、彼女はもう一つの顔を持っている。

しばらくレッスンの様子を見た後に、突然、高橋みなみは動き出した。ドアの横から鏡の前、部屋の前中央に移動し、そして「集合」と研究生達を集めた。指原と北原も、顔を見合わせてから高橋みなみの下に言った。

集まったときには既に高橋みなみの顔から笑顔が消えていた。そしてゆっくりと口を開いた。

「えっと……、今日は学校帰りの人が多いのかな？」

その言葉に対して、まばらに研究生達は頷いた。

「そっか。まあ、それだったら、確かに疲れてるとかあるかもしれないね。季節的にももう夏だし、梅雨が明けたばかりで気持ち的にもダレてしまうかもしれない。うん、でもね、だからって」

そこで一度間を開けて息を吸ったのがわかった。

「ダラダラやってんじゃねーよ!!!」

怒号がレッスン場に響いた。

レッスン場は一瞬にして無音状態までに静まりかえった。研究生の中には当然、北原のような高橋みなみと年齢的に同い年の人、また年上の人もいた。しかしそのような年齢上の上下関係など高橋みなみには関係なかった。だれもに平等に怒りを表した。しかし、だからといってそれに反抗はおるか反感を買うことさえ全くなかった。それが彼女の培ってきた歴史のおかげかもしれないし、または彼女の持つ独特の存在感というのもあつたかもしれないが、とにかく、彼女はそのようなもの全てを持ってして場の空気を独りで制していた。「練習見てたらさ、みんなダンスに集中せずにきゃっきゃしながらやっててさ、すげーかつこ悪いよ。ダンスもそのせいで全然まともってないし。」

レッスン場にいるコーチまでもが彼女を食い入るよう見つめていた。

「私達は遊びでやってるわけじゃないってことくらいわかってるだろ？ 研究生だつて、研究生公演や誰かのアンダーで金貰つてステージに立たせてもらってるんだよ。その責任の重さは正規メンバーも研究生も関係ない。みんなでその責任を担ってるんだよ。だからさ、常に全力でやれよ。一人一人が責任担って一人一人がやるべきことを全うして初めて一つのチームになる。そうして初めてファンの方達に見てもらえる。AKBっていうグループは常にガチ。全力。それができないなら辞めてしまえばいい。」

高橋みなみの言葉一つ一つは北原や指原に響いた。全て正論だ。悪いところが一つでもあるとすれば、それはやはり研究生のレッスンに対する態度以外にないだろう。高橋みなみがどんなレッスンでもテレビ出演でも全力で臨んでいるのを皆知っていた。それ故に言い返せる者などいるはずもなかった。

高橋みなみは続けた。

「でも、辞めて欲しくない。私は、AKB48を家族だとも思っているから。だから、常に全力でやれよ。」

そう言って笑った。

そしてまた研究生達はレッスンに戻っていった。それから後は先ほどまでとは全く空気が異なっていた。その場にいる者皆がそれを感じた。

5期生あたりが入った頃にはAKB48は知名度が少しずつ上がり始める最中にあった。そのため、初期メンバーではAKBを通過点と見ている者が多かったのに対し、5期生などは、AKBに入りたくて入る、という者のほうが多かった。だからこそ彼女達にとっては劇場公演こそが全てなのだ。そしてそれに対して全力で臨むというのは当然のことであり、初心であったため、余計に高橋みなみの言葉が大きく感じたのだ。

北原と指原もそれに漏れることなく全力でレッスンに赴いた。レッスン中、目の端で、高橋みなみに対し、劇場支配人である戸賀崎が「すまん」と礼を言っているのが映った。

全力で臨む中、それでも北原はチャンスを待ち続けた。未だ諦めてはいなかった。

指原と共に上へ行くため。

そして、北原は動き出した。

りのりえ、怒られる。(後書き)

三月中頃、しばらくごたごたしてたため更新できませんでした。こ  
つからまた書いてきます。

りのりえ、動き出す。

高橋みなみは先ほど研究生達を集合させた後も鏡の前、皆の目に入る位置であぐらをかいて座っていた。その所為とういべきかおかげというべきか、相変わらずレッスンは緊張した空気が流れていた。そもそもコーチや劇場支配人の戸賀崎も冗談にも優しいと呼べるような人ではなく、怒鳴られることも少なくは無い。それ故に常にレッスン場には緊張感はあるものだ。しかし、高橋みなみという存在はそれとはまた別の緊張感を漂わせていた。AKB48の始まりから在籍し、初めこそダンスでは落ちこぼれ組であったという。しかし、努力を怠ることなくレッスンを励み、そして後々にはAKB48全体のまとめ役として重役を担うこととなるのだ。

その。キャリアこそが、研究生達には大きかった。彼女の言う言葉には、リアルがあるのだ。彼女から発せられるリアルは、やがて研究生へと回帰する。高橋みなみに認められること、好かれることはつまりはAKB48として成功すると同等だと考え、そしてそれはプレッシャーとなるのだ。そしてそこから発生する、焦燥にも似た思いこそ、このレッスン場の緊張感の正体であった。

そして、それはやはり北原にとっても同じだった。とかくアイドルグループはメンバー同士仲が悪いと思われがちで、売れるに至ってそのようなことは関係ないというのが一般的だが、AKBはそうではない。他者からの、メンバー、ファンからの信頼こそが出世の鍵、メンバー同士の絆こそが成功の秘訣とされているのだ。それ故、AKBの選抜グループ、特に絶対的センター前田敦子や、全体を指揮する高橋みなみの信頼を得ることは必要条件であると言えるだろう。

そして、他の研究生と同様に感じる緊張と、さらには、その高橋みなみに対して、言ってみれば探りを入れなければならぬその状況は、北原にとってさらなるプレッシャーを与えた。

作戦と呼べるほどのものを立てている訳では無かった。  
簡単なことだった。

レッスン中、高橋みなみが見ている中でわざとこけて見せるだけだ。怪我というのはレッスンにおいて必ずついてくるものであり、それほど驚くべきことでもない。しかし、北原がやるうとしてしていることは、もっと突発的なアクセントであった。当然、フリでこけるには変わりはないが、指原の協力も得て、横で騒ぎたててもらい、高橋みなみの、研究生達の注目を集めるのだ。高橋みなみにしてみれば、それは予想していなかった出来ごと、正にアクセントだろう。そして、北原が痛がって騒ぐのを見てどのような反応をするか、それを知ろうということだ。

突発的なアクセントが起こった時こそ、その人の本質的な部分を見ることが出来るのではないか、それが、北原の考えたことであつた。

指原も隣で緊張しているのがわかつた。

タイミングが重要だ、北原はそう思った。急いではまえば失敗する。かといつてもたまたましていれば、高橋みなみが帰ってしまうかもしれない。そもそも高橋みなみは常に多忙だ。わざわざ長居する理由など親切心以外のなものでもないのだ。

曲は2回目のサビが終わり、中盤から終盤へと移っていった。終盤へと移行するとき、曲が転調し、そこでダンスも急に激しくなるポイントがある。北原が狙っているのはその、絶妙ではあつたが、その一か所だけだった。

大丈夫、家で、何回もこける練習したから……。

いよいよ曲の転調が近付いていた。

心臓がどんどん高鳴り、今にも心音が聞こえてきそうなほどであつた。

いけるっ！

一瞬の出来事だった。

北原は、こけようとした。

しかし、気がついていなかった。こけようとした方向に、指原がいたことに。

指原の存在に気が付き、態勢を立て直そうとするときには、既に遅かった。

指原のほうも、無理に避けようとし、身体を後ろに大きく反らした。

北原はなんとか足を前に出し、指原のほうに倒れ込むのを防いだ。しかし、なんの準備もしているはずもなかった指原は、北原の目の前で、ゆつくりと、倒れていった。

全てはほんの2秒の間に起こった。

レッスン場には、大きく鈍い音が響いた。

りのりえ、動き出す。(後書き)

少しだけ、物語が展開し始めました。

りのりえ、困惑する。

指原は初めは何が起こったのかが頭で理解することが出来なかった。

指原の役目は、北原のサポートであった。目の前で派手にこける北原を見て大げさに騒ぎ立て、彼女のほうに注目を集める。そしてその時の高橋みなみの様子を目で追う、というものであった。

しかし、偽のアクシデントは本物のアクシデントへ。ミイラ取りがミイラと化すように、全ては彼女達へ本物のアクシデントとして帰って来たのだ。

突然、北原の身体が近付いてきたと思ったら、次の瞬間には、指原は床に倒れ込んでいた。初めこそ、何が起こったのか判らず、混乱状態で倒れたままになっていたが、足を駆ける鈍痛は、遅れて沸き起こった。

「うっ。」

思わず絞り出すような声を出した。

「さっしー！！」

横で北原が叫んだのがわかった。

彼女こそ、今の出来ごとに一番驚いていることであろうと指原は思った。

自分がこけるはずであった北原は、隣で本当にこけたパートナーを見て顔を青くしていた。

指原は思った。

きたりえ、大丈夫かな。

足に響く痛みよりも、もっと大きな痛みが心を走った。

きたりえは、まじめだから。全部自分のせいだと思って死ぬほど悔やむに違いない。

もはや、調査などどうでもよくなっていた。というより既に頭からそのことは消えてしまっていた。

自分のせいにして泣くであろう北原を思つて、辛くなつたのだ。二人の間に、無音の空気が流れた。

研究生達が、心配そうに周りに集まつてきた。コーチもすぐに駆け寄つてきた。

時間に見ればほんの何秒かの間であつた。

しかし、二人にとつてとつてもなく長い時間だつた。

「みんな！」

そして。

その声がレッスン場に響いたとき、また時間が急速に音を立てて戻つていった。

声の主は高橋みなみだつた。

「指原の介抱はコーチにまかせて、レッスンに戻つて！早く！」

指原は目の端に映る高橋みなみが研究生たちに大きな声で指示を出しているのを見た。その声で研究生達は、心配そうに指原のほうに目を向けながらもレッスンに戻つた。

「大丈夫か？指原。」

高橋みなみはしゃがみ込んで倒れたままの指原に尋ねた。

「あ……、はい！」

指原は勢いよく立ちあがろうとした。指原は焦つた。高橋みなみの目を見て。

まっすぐ、指原を見つめていた。

指原は思つた。

嘘は吐けない。多分、吐いてもばれる。

まっすぐに心配する目だつた。

「北原は？態勢、最初に崩したのは北原だろ？接触はなかつたように見えたけど、足とか捻つてない？」

北原はびくりと身体を震わせ、

「え？あ、はい、あ、いえ……えと」

言葉を詰まらせた。

高橋みなみは返答を待たずに言った。

「とりあえず、外に出ようか。骨は大丈夫だと信じたけれど、捻っ  
ていてもとりあえずは冷やさなきゃ。えっと、北原は歩けるだろ？」  
先程とは打って変わっての優しい声だった。北原は大きく頷くと、  
高橋みなみはにこっと笑ってそして立ち上がり、指原に肩を貸した。

指原は高橋みなみに寄りかかる形になって歩いた。  
すごく小さい。そう思った。

指原よりも大分背は低い。しかし小動物のような小さな身体は指  
原の体重をしつかり支えていた。スタッフが手を貸そうとしたが、  
チーム内のことなので、と言って高橋は差し伸べる手を拒んだ。

A K B 4 8とは高橋みなみのことである。

秋元のその言葉が、指原の頭をよぎった。

りのりえ、困惑する。(後書き)

週末の握手会、行こうと思います。

りのりえ、高橋みなみの話を聴く。

お好み焼き源五郎。

じゅーじゅーと肉の脂がはじける音がした。

しかし今回は先日とはいくつか違いがあった。まず一つには指原と北原が向かい合わせに座っているのではなく、隣同士に並んでいることであった。二人のそれぞれの豚玉と牛玉は、彼女達と同じように仲よくひつつくようにして並んでいた。そしてその二つのお好み焼きの前にある、ミックス玉。牛、豚にイカやネギをふんだんに使った一品が、鉄板を牛耳るように真ん中に佇んでいた。

「いやあー、本当にうまそうだなあ！もうちよつとかな？もうちよつとかな？」

そして一番の違いは、二人の目の前で嬉しそうにはしゃぐ彼女。

「んー、まだ肉がちよつと赤いなあ。牛は赤くても良いけどさすがに豚はねえ。なあ、指原？」

彼女こそ、指原と北原が調査の対象とする高橋みなみであった。

「あ、はい、そうですね。」

指原は小さな声で返事した。

「なんだあ元気ねえなー。いいじゃんかよ、結果的に骨折までは至ってなかったんだしさあ。九死に一生だと思うよ。本当にさ。北原もそう思うだろ？」

高橋みなみはそう言ってほほ笑んだ。今日の昼、研究生達を前にして怒声を上げた人と同じ人とは思えなかった。こうして一緒に机を囲んでみれば、すごく小さな、かわいらしい女の子だった。頭には赤い大きなリボンが付いていて、ラメがきらきらしていた。

「いえ、私の不注意でこういう結果を招いてしまったので……」

北原も小さく低い声で言った。

北原も見て判るほどに落ち込んでいた。大事には至らなかったとはいえ、少し間違えれば指原は骨折していたかもしれない。そうな

れば、正規メンバー昇格どころの話ではなくなる。下から今か今かと昇格を狙う者は大勢いるのだ。それこそ少し足が止まっただけであつという間に追い抜かれてしまう程だ。現に宮崎美穂は先日昇格が発表されたばかりだった。5期生最初の正規メンバーに昇格したメンバーである。AKBにおいてはチームメイトは仲間であると同時に常にライバルなのだ。それを考えると、もし仮に指原の足を引つ張つたために彼女の昇格が遅れてしまうとすれば、それは自身自身のこと以上にショックな出来事だと言えるだろう。

「もう、暗くなるなよー。せつかく私が今日はおごるって言うてるのにさあ。」

「はい。」「はい。」

二人はゆっくりと顔を上げて返事した。

そして、それぞれのお好み焼きが調度出来上がり、しばらくは黙々と食べ続けた。

「レッスン中の事故は、あつてはいけないことだけど、必ずあることなんだよ。」

最初に口を開いたのはやはり高橋みなみだった。彼女は続けた。

「人の調子なんて常に一定でベストコンディションなんてあり得るわけないし、それぞれにはAKBとしてではない普通の生活があつて、その上でのストレスや悩みがあるのは当然のことでしょう？そういうのがダンスに出てしまうのは、本来はあるべきではないことだけど、誰も避けることができないこともある。だから、もしそうなつたときに、どうすることが必要だと思つ？」

高橋みなみは二人を交互に見て尋ねた。

二人は互いに顔を見合わせて、それから返事が思い浮かばずに高橋みなみのほうに視線を戻した。

「それは、前を向くこと。」

まっすぐに見つめる視線が二人に刺さつた。

「どんなすごい人でも失敗はある。そういうとき、トップに立てる人とそうでない人の違いは、そこから立ちあがる速度。早く立ちあ

がって次に向かおうとする人は、その分多くを学んで次につながれる。でもそうでない人は、立ち上がれずにと顔を伏せたまま。私は、私も出来るほうの人間じゃないから、常にそうやって誰よりも早く立ちあがりたいたいと思ってる。」

立ちあがる。

その言葉が心を反響した。

「だからね、つまり、えっと……、ああもう！言いたかったこと忘れた！だから！」

高橋みなみは頭をふりふりと振って椅子から勢いよく立ちあがった。

「とりあえず、今日は楽しもう！」

指原と北原も衝動的に立ちあがった。

「はい！今日は思いつきり飲みましょう！」

指原は威勢よく言った！

「そうだ！飲もう！って未成年やないかい！」

高橋みなみはすかさず突っ込んだ。

「そうだよさっしー、飲むのは少しだけ！」

北原も負けじと叫んだ。

「そうそう、少しだけなら大丈夫……ってんなわけあるかぁー！」  
指原と北原。

二人はようやく今日初めて笑った気がした。

りのりえ、高橋みなみの話を聴く。(後書き)

先日はじめて握手会に行きました。さっしーのと握手しました。と  
りあえずこれで一カ月は何もなくても生きていけます。

りのりえ、今回は台詞多め。

鉄板の上にこびりついた焦げから香ばしい香りが立ち上る。高橋みなみは、次の日の朝が早いということ、先ほど名残惜しそうに帰って行った。鉄板を前に、北原と指原はぼうつとして何も言わずに座っていた。

「……どうしよっか？」

最初に口を開いたのは北原だった。

「どうするって何を？」

背もたれに深く寄りかかって上を向いていた指原は、北原の問いに身体を起こして疑問で返した。

「報告のことだよー……。」

「ああ、うん。」

秋元康の言葉一つ一つが頭をよぎった。

「思うところは、無いわけじゃないんだよね。」

「そうなの？うん、でも指原も少しは、思うところはある……。でも、それをどう言葉で表現していいか、よくわかんない。」

「ああ、うん、私もまさにそういう感じかも。」

「とりあえず、たかみなさんは、優しい人だなって思った。」

「……月並みだね。」

「月並みってどういう意味？」

「……月のようにすごいってこと。」

「え？何が？え？どういうこと？」

指原はきよとんと首を傾げた。北原ははあと溜息をついて、

「うん、まあ、気にしないで。さっしーには少し難しかった。」

と言った。

「ああ、りっちゃん頭いいもんねー。指原はこないだの期末テストもひどいもんでしたよ……。先生にはAKBとの兼ね合いが大変だからねって言われたけど、そんな理由にならないし、つまり自分

のおごりなわけだし……はあ。溜息。」

「うん、そうだね。どりあえず、話それてるから戻そうね。……あれ、何の話だったっけ。」

「たかみなさんが優しいって話だよ！」

「そうだったそうだった、それは月並みな返答だね。ってこれじゃもうエンドレスループ入っちゃいそうな気がするから、もうちょっと他にないかな。」

北原はそう言って腕を組んだ。

「でもやっぱり恐いときもある。」

「ああ、確かに最初にみんなを集めて話をしたときは恐かったもんね。喝を入れられたって感じだった。」

「しかもそこからあの優しい感じのトーンに持っていくわけだからね。まさにツンデレだよ。ああもう、それで良い気がしてきた！」

「え、どれで？」

「報告、たかみなさんはツンデレでした！」

「そんなこと言ったら昇格権剥奪どころかAKB解雇だよ……。」

「や、でも秋元先生ってそういうジョーク好きそうだし。」

「まあ、それでもTPOはあるからね。いつでもジョークに寛容なわけじゃないから。」

「TPOって？TIMと同じようなもの？」

「なんでもないよ！聞かなかったことにして！ていうか聞かなかったことにする！」

北原は爽やかな笑顔でそう言った。

「？まあいいか。うーん、じゃあどうしようか。」

「もうこうなったら、誠意を見せつけるしかないよね。」

「最後はやる気と気合と根性を見せ付けるしかないよね。」

作戦もくそもない。報告もくそもない。

開き直って、思ったことをありのままに伝える。

二人はそう覚悟を決めた。

そして店が閉店になるまで、秋元康に報告することを話し合った。

そして……。

翌日。

秋元康の前に二人は立っていた。

「さて。じゃあ、聞かせてもらおうかな。」

秋元康はにこにこ笑っていた。

二人は、北原と指原は、一度互いの顔を見合って、こくりと頷いた。

そして、彼女達の運命を決める、初めての報告を始めた。

りのりえ、今回は台詞多め。(後書き)

今週のさしこのくせに、りのりえ対決最高でした。

りのりえ、語る。

「たかみなさんはすごく優しい先輩です。」

そう、切り出したのは指原であった。そしてそれに続くようにして北原も話し始めた。

「いつもメンバーのことを気遣ってくれていて、つい先日も研究生である私達がミスでこけてしまつて落ち込んでしまつた時、忙しいのに私達のために時間を割いて慰めてもらえました。」

「うん、そうだね、彼女は常に周りに目を見張っている。誰か怪我している人はいないか、あるいは精神的に不安定であったり落ち込んでいたりしている人がいないか、常に気遣っている。僕はそれはたかみな最大の長所として捉えているよ。」

秋元は二人の言葉にそう返答した。秋元表情を表には出しておらず、彼の様子から本心を導くことは出来なかつた。一抹の不安を抱きつつも、立ち止まらなないと決めた二人はさらに言った。

「あと、たかみなさんは、恐い人でもあります。」

「時には研究生や、正規メンバーの中でも年上の人達を前にしてでも臆することなく声を上げて注意するんです。」

「それでも、私達がその言葉に耳を傾けることができるのは、たかみなさんの言うことは本当に正しいって確信できるからです。誰だつて言つた当人が出来ていなければその言葉が安つぽく聞こえてしまつものなんです。たかみなさんは、言つたこと全てを完璧に為し得ているからこそ言葉に真実味と重さがあるんだと思います。」

「指原が言うように、たかみなさんはダンスの面でも歌の面でも誰よりも時間が少ないのに誰よりも完璧に仕上げようとする、その姿があるからこそ、私達はたかみなさんを本当に信頼することが出来ています。そして彼女の言葉、それがきつい言葉であつてもしつかりと聞けて、受け止めることができるんです。」

秋元は二人の話に小さく頷きながら、やはり無表情のまま話を

聞いていた。そして、二人の話が切れるのを確認すると、「ごほごほ」と咳をして、そしてまた言った。

「正直な話、僕は彼女を叱ったことは一度も無い。叱ったことがないのはたかみなだけかな。それは何故か。それはたかみなが完璧でなくとも常に完璧であるうとする、その努力を決して怠らないからだ。誰にでも出来ることじゃない。そんなこと大人だって出来やしない。だから僕は彼女を叱ることはない。叱る必要がない。叱る意味が無い。それどころか、たかみなの仕事に対する態度は、僕自身が見習うべきところがあると感ずるくらいだよ。」

指原と北原は緊張の面持ちで秋元を見つめた。

「さて、報告は終わりかな？」

秋元は話し終わって区切りをつけるようにそう言った。

「いえ、あの、あの、あと、もう一つ……あります。」

そう言ったのは指原だった。

これは賭けだった。二人で前日に言おうと決めた賭け。

「ほう？」

秋元は方法の眉を吊り上げてほくそ笑んだ。北原は、指原のほうに確認を取るように目を向けた。すると指原もそれに気付いて、小さく頷いた。

「本当に、どうでもいいことなんです。でも、報告っていうのはつまり、こういうことなんじゃないかなって、思ってる。」

「なんだい？」

秋元は優しい表情だった。

「たかみなさんは、箸の持ち方が汚いんです。」

北原は声を大にして言った。そして続けた。

「私も人の事言えたものではないんですが、箸の持ち方が本当に汚いんです。クロス箸になっているというか……。」

そして今度は指原が言った。

「完璧ではないんです。弱点もあるし、欠点もいっぱいある。私なんかよりはよっぽど少ないかもしれませんが、それでもそういうのがやっぱりあるんです。でも、それを常に直そうと努力している。完璧を目指して本当に努力しているんです。それを知って思ったんです。これがAKBなんじゃないかって。」

「色々な人がいて、誰もが良い点と弱点を持っていて、弱点と必死に闘って克服しようとする。そして真のアイドルグループとなるために一歩ずつゆっくりと階段を上っていくんです。つまり、たかみなさんこそ、AKBの『会に行けるアイドル』のコンセプトの裏にあるもう一つのコンセプトを体現している人なのではないか。そしてその理想像であるからこそ、私達はたかみさんをリーダーとして見る事ができるのではないか、そう思うんです。」

「思うんです。」

指原は付け足すように言った。

「たかみなさんは、私達の目標であるから、リーダー。」

北原は言葉を選らぶように慎重に、ゆっくりとそう言った。そして二人、声を揃えて言った。

「これが私達の報告です。」

りのりえ、語る。(後書き)

たかみな、多分箸の持ち方、普通だと思います。なのでその点は演出の一つだと思ってください。てかむしろきたりえこそ箸の持ち方やばいらしいですね。ネ申で言っていました。

りのりえ、昇格、そして。

左右のアンブから流れる巨大な音の波。

それに負けんと声を張り上げる客席を埋めるファン。

そして、嵐のような舞台の上で、存在が掻き消えてしまわないように、手足を、指の先まで集中して大きく振り上げるメンバー。

ここは秋葉原にあるAKB48劇場。

大勢の人がひしめき合つて、自らの力をメンバーに捧げようと、大きく手を振り上げていた。

メンバーもそれに負けじと全力で答える。

ここにあるもの、それがAKBの原点と言えるだろう。

2008年、7月30日。

チームA4th「ただいま恋愛中」リバイバル公演。

前田、高橋らを筆頭に、公演は順調に勧められていった。そして。

「えーつと、ここでみなさんにお知らせがあります。」

MCで高橋みなみがそう言った。

「なにになに？」

メンバー達がそれに呼応して高橋みなみのほうに目を向けた。

「なんと、今日、研究生から新たにチームAに昇格することになったメンバーがいます！」

高橋みなみは嬉しそうに声を上げた。

「うおー、と劇場内に大きな声が鳴り響いた。

メンバー達も、おおー、と同じように声を上げた。

「そのメンバーは、研究生の、北原里英ちゃんです！」

そして、さらにおおきな声が劇場を包み込んだ。

北原は昇格のことを知っていた。

秋元康に報告をしたとき、なぜかは結局のところよくわからなかったのだが、彼の評価が想像以上に高く、その場で「合格」をもらったのだ。

当然、指原も合格をもらった。

晴れて二人揃って正規メンバーへの昇格が決まったのだ。

二人はその夜、またお好み焼きで昇格を祝った。そして、北原は帰ったあとも興奮が冷めやまず、ふとんの中で足をじたばたさせて、最後には変に感慨深くなり、涙を流した。

十分過ぎるほどに喜んだはずだったのだ。

しかし、それでも。

激しく鳴り止まぬ声援。

メンバーから送られる温かい歓迎の声。

その、全てが北原の心を熱く刺激した。

そして、いつの間にか瞼がまた熱くなり。

「えー、北原です。今日は本当に、本当にありがとうございます！」

マイクを手渡された北原は、声の出る限りに叫んだ。

そして思った。

どんなことがあっても、がんばろう。

何があっても、やりぬこう。

最後まで、女優として舞台に立つまで！

北原は心に誓った。

同時刻。

突然、劇場支配人の戸ヶ崎の携帯が鳴り響いた。

彼自身、北原の昇格を見て、少しだけ胸を熱くしていたところだった。

携帯の画面には、「秋元康」の文字が出力されていた。

戸ヶ崎はすぐに携帯にでた。

「はい。どうしました？」

その日は秋元康はSKE48のメンバーを決めるための最終審査に出向いているはずだった。そもそも彼から電話がかかってくること自体珍しく、よほど何かがあったのだろうかと体を少し硬直させた。

電話の奥からは、秋元康の低い笑い声が聞こえた。

「すごいんだ。」

一言、彼はそういった？

「何がでしょうか？」

訳もわからず電話越しで首をかしげることしかできなかった。

「あえてこう評価しようと思う。そう、

彼女は10年に一人の逸材だ。

この言葉に、お世辞など微塵もない。」

「それは、SKEの新しいメンバーのことですか？良い人材でもいたのですか。」

「ああ。これは、波が来るかもしれない。」

戸ヶ崎は電話越しに感じるビリビリと体を揺らす秋元康の言葉の覇気に鳥肌が立つのを感じた。そもそも彼はあまり人を良い評価することがない。それは、厳しいのではなく、真に見る目があるゆえに、過大評価も過小評価もしないからだ。その秋元にそこまで言わしめる人物。

戸ヶ崎は先日渡された最終審査に残ったメンバーの顔ぶれをおぼろげに思い出した。

「それは、誰なのですか。」

戸ヶ崎はおそろおそろ尋ねた。

少し間があつて、それから一言、秋元は言った。

「松井珠理奈だ。」

つづく。

りのりえ、昇格、そして。（後書き）

何ヶ月ぶりだろうというくらい久しぶりの更新です。

とりあえず一区切り。

とりあえず一話終了。

次は大声ダイヤモンド時代について書こうかな。

もっと登場人物増やしてごちゃごちゃさせたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2586r/>

---

AKB48監査委員会りのりえ

2011年9月29日03時24分発行